

新教育運動における作業場のレリヴァンス

—「社会への開かれ」志向の指標としての職業教育に注目して—

伊藤 敏子

Relevance of Workshops in New Education-oriented Schools —Change of “Openness toward Society” in the Context of Vocational Training—

Toshiko ITO

Abstract

The new *Japanese Curriculum Guidelines*, as announced by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in March 2017, aim for a “curriculum that is open toward society” so that the rising generation may be able to adapt to changing circumstances. The attitude of “openness toward society” can be cultivated not least in vocational training. Some schools pursuing the ideas of New Education have offered curricula combining academic learning with vocational training from their founding days in the early twentieth century up to the present time. This paper focuses on the variables and invariables of the relevance that workshops have held in the vocational training at reformist German boarding schools located in a rural setting. Odenwaldschule (1910–2015) emphasized students’ activities in the workshops, which, however, were not intended directly to foster an attitude of “openness toward society” in the prewar period. In the postwar period, the school revised the curricula, offering the acquisition of *Abitur* (baccalaureate diploma) in parallel with the recognition of vocational credentials; in recognition of these achievements, Darmstadt’s Chamber of Commerce and Industry awarded the school a certificate of “*Zukunftswerkstatt* (workshop of the future)” in 2013. Urspringschule (1930–) has consistently stressed students’ activities in the workshops. The school offers curricula which include not only the *Abitur* diploma, but also apprenticeships in carpentry, tailoring, and precision engineering; in recognition of these achievements, Germany’s Economic Juniors awarded the school a certificate of “Fit for Job School” in 2008. The reinforcement of vocational education lends the New Education-oriented schools a high profile, at the same time expressing its attitude of increasing “openness toward society”.

キーワード：新教育・作業場・職業教育・社会への開かれ

Keywords: New Education, Workshop, Vocational Education, Openness toward Society

1. 教育における「社会への開かれ」志向：職業教育の視座から

1980年代後半以降に浸透した「個性」や「生きる力」等の旗印によって拡張された日本の教育の特性を「ハイパー・メリトクラシー化」と称した本田由紀は、2017年3月に告示された次期学習指導要領に顕著な「『資質』『態度』という新たな徳目を、『主体的・対話的で深い学び』や『カリキュラム・マネジメント』により再びすべての国民に要請する」¹という方向性を根拠として近年の日本の教育の特性が「ハイパー教化」と称しうる新たな段階にあることを示唆している。「ハイパー教化」という時代の到来の証左としてかけられる次期学習指導要領は、その一方で、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ことを

¹ 本田 2018、64頁。

謳う「社会に開かれた教育課程」²という相を有している。児童生徒が学校を卒業した後、身を置くことになる社会を見通すことが困難な時代にあつて、児童生徒が「社会の創り手」として生きることを想定した学校教育の役割について考察をすすめるにあつて、本稿では「社会の創り手」の一側面をなす活動である職業に向けられた教育に注目する。

2. ドイツ新教育運動における「学習と労働の結合」

「教育と労働の結合」という人間形成の構想に着目するならば、その源流は——労働と祈りを説くベネディクト会や信仰と労働を説くプロテスタンティズムに代表される——キリスト教の伝統にまで遡ることができる³。そこで期待されているのは、ひとつには労働がもたらす——たとえばカルヴァン (Jean Calvin, 1509-1564) が禁欲的労働というエートスに支えられた生産活動の結果としての利潤を肯定したことによって活性化される——経済上の成果であり、今ひとつには労働に向き合う勤労の精神を培う——たとえばウェーバー (Max Weber, 1864-1920) がプロテスタンティズムの倫理と同定した近代資本主義を支える勤勉等の諸徳を獲得させる——教育上の成果である⁴。

前近代的生産モデルおよびこれに対応した資格認定モデルが崩壊した 19 世紀末、イギリスとフランスは 20 世紀初頭に浸透する産業社会に対応した資格認定を開発しこれを取得させるべく新たな職業教育制度の構築に着手するが、ドイツは——これとは対照的に——新たな職業教育体系を開拓する道ではなく——ドイツ式職業教育として現在にいたるまでその有効性を堅持することになる——中世由来の手工業教育に回帰する道を選び、これに対応して徒弟教育や資格審査制度を担う手工業会議所やイヌングを設立する⁵。

新教育運動は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての世紀転換期、世界全体を巻き込むかたちで多岐にわたる「新しさ」を追求する一連の教育の改革を推進するが、新教育運動の眼目のひとつとして「一般教育と職業教育の結合」がかかげられていたことは広く知られているところである。ドイツにおける新教育運動と職業教育の連関についての考察を 2013 年に公にしたグライネルト (Wolf-Dietrich Greinert) とヴォルフ (Stefan Wolf) は、新教育運動と職業教育の連関を主題とする研究が教育科学の分野においてほとんど行われていないことを指摘したうえで、新教育の改革志向の高揚と職業教育の改革志向の高揚がいずれも運動というかたちで同時期に現出したことに注目し、そこに意図的ないし実践的な作用関係が横たわっている可能性を示唆する。1890 年から——ヴァイマル共和国が終焉を迎える——1933 年までの半世紀弱の期間に、新教育は世界的規模の運動としてその頂点に到達し、職業教育は今日の「デュアルシステム」につながるドイツ的制度の基礎と枠組みの定立に到達しているという事実の背景に、グライネルトとヴォルフは単純な偶然性に帰することのできない、何らかの必然的な共通の契機を措定するのである⁶。

20 世紀初頭にミュンヘン市視学官を務めたケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner, 1854-1932) は、改革志向の高揚した時代にあつて、職業教育ないし将来の職業に向けた施設づくりに取り組むことで新教育と職業教育を架橋することを試みた人物である。手工業の陶冶価値を重視するケルシェンシュタイナーが牽引した労作学校運動は、新教育運動と職業教育改革運動の接合点として機能することになり、この功績によりケルシェンシュタイナーは「新教育の巨匠」そして「職業学校の父」と称されるこ

² 文部科学省 2017、2 頁。

³ Vgl. Uhlig 2013, S. 1011.

⁴ Vgl. a.a.O., S. 1012.

⁵ Vgl. Greinert/Wolf 2013, S. 778.

⁶ Vgl. a.a.O., S. 777.

とになる。人文的教養を体現する市民階級と手工業従事を体現する労働者階級という階級的区分を前提とする社会理解が支配的であった 20 世紀初頭にあつて、ケルシェンシュタイナーが提起した「公的に整備された職業教育を介した公民教育の実施」は、次世代を担う児童生徒に対して「職業準備」と「政治的社会的結合」を促すものであり⁷、この特徴からはケルシェンシュタイナーの教育構想が「社会への開かれ」志向を内包させる教育構想であつたことがうかがえる⁸。

新教育運動における「学習と労働の結合」という視点からグライネルトとヴォルフが注目するは、シュタイナー (Rudolf Joseph Lorenz Steiner, 1861-1925) 教育学を基調とした独自の教育を展開するヒベルニア学校 (Hiberniaschule) である⁹。シュタイナーはみずからの人智学 (Anthroposophie) を素地とする人間形成の理念と呼応する教育の実践を目指し、1919 年にヴァルドルフ＝アストリア煙草工場に自由ヴァルドルフ学校 (Freie Waldorfschule) を設立する。シュタイナーが構想したカリキュラムは理論的学習と芸術的学習と実践的学習の統合を土台とし、この土台のうえに「一般教育と職業教育の結合」を試みるカリキュラムである。したがって、このカリキュラムは「社会への開かれ」志向がきわめて強いカリキュラムになっていたといえる。

ヒベルニア学校は 1952 年にフィンテルマン (Klaus Fintelmann) がヒベルニア株式会社社室素工業施設実習作業場に設置した教育施設をもってその嚆矢とする。総合学校 (Gesamtschule) ヒベルニア学校は「職業専門学校および職業短期ギムナジウムを併設した職業小学校」という特徴を有する教育実践によって当初から注目されていたが、1957 年にこの教育実践に対する評価に基づいてユネスコのモデル学校に指定されるにいったことでその知名度を飛躍的に高める。1966 年には既設の総合学校に新設の補習高等専門学校 (Kolleg) が加わる。ヒベルニア学校が州によって認可された教育活動としては「職業教育」、「高校卒業 (大学入学) 資格」、「シュタイナー教育学にもとづく授業」¹⁰が明記されている。ヒベルニア学校は現在、社会法人ヒベルニア学校協会によって運営され、幼稚園・初等教育施設 (第 1 学年から第 6 学年)・前期中等教育施設 (第 7 学年から第 10 学年)・後期中等教育施設 (第 11 学年から第 14 学年) によって構成され、そこでは「学習と労働の結合」するカリキュラムに沿って 4 歳から 20 歳の 1200 名の児童生徒が学んでいる¹¹。

カリキュラムの基本方針はシュタイナーの人智学から導き出された教育構想をその根幹に据え、「言語・博物学」と「数学・科学」と「生活・職業」を軸とする「理論系授業」、「言語・音楽」と「造形・絵画」を軸とする「芸術系授業」、そして「実践型授業」という三種類の授業によって構成される。授業形態としては、シュタイナー教育学に特徴的なエポック授業と並んで、専門授業、講習 (42 コース)、職業専門授業が導入されている。第 1 学年から第 12 学年は職業教育を融合させた総合学校であるが、区分としては第 7 学年から第 10 学年が職業実習 1 年目に相応する基礎的職業教育期間¹²とされ、第 11 学年から第 12 学年が職業実習 2 年目と職業実習 3 年目に相応する専門的職業教育期間とされる。なお、補習高等専門学校 (第 12 学年から第 14 学年) では高校卒業 (大学入学) 資格の取得にとどまらず、ノルトライン＝ヴェストファーレン州法に基づき「幼児保育士」の国家資格の取得、さらに連邦法に基づき

⁷ Vgl. Uhlig 2013, S. 1019.

⁸ Vgl. Greinert/Wolf 2013, S. 779.

⁹ グライネルトとヴォルフによれば、ヒベルニア学校は「20 世紀のドイツにおける孤高の灯台」(Greinert/Wolf 2013, S. 785) とも称されうる存在である。

¹⁰ ヒベルニア学校は設立時から現在にいたるまで一貫して人智学に基づくシュタイナー教育学に沿った教育活動を展開しているが、自由ヴァルドルフ学校連盟 (Bund der Freien Waldorfschulen) からは 2012 年をもって離脱している。

¹¹ ヒベルニア補習高等専門学校には現在およそ 180 名の生徒が在籍している。

¹² 基礎的職業教育においては一般教育と職業教育を融合したカリキュラムが提供されている。例えば、科学の授業と手工業の授業は一体化したかたちで実施される。

「仕立師」・「電気技術工」・「精密機械工」・「建具師」の国家資格の取得が可能である。ヒベルニア学校では児童生徒の年齢に応じて「学習と労働の結合」を旨とするカリキュラムが提供されるが、卒業時にはその帰結として学業と職業という二様の教育課程を修了することが可能となっている。ヒベルニア学校の現状としては、すべての生徒が第12学年で職人検定審査を経て専門技術職の検定資格を取得し、このうち3分の2の生徒についてはこれに加えて高校卒業（大学入学）資格を取得している。

グライネルトとヴォルフは実践的職業的教育を組み込んだ総合学校であるヒベルニア学校を「新教育の構想の特異な発展型」¹³として位置づけているが、ヒベルニア学校の独自性は、端的には「経済的な生産に携わり、近隣地域の経済企業体との協同により運営される作業場の複合体」¹⁴と称されるものであり、この独自性は同時に職業教育を介する「社会への開かれ」志向のひとつの表れとみなされるものである。

3. 戦前のドイツ田園教育舎運動における作業場のレリヴァンス

新教育運動と職業教育改革運動を架橋する「社会への開かれ」を意識したケルシェンシュタイナーの教育構想は、とりわけドイツにおける新教育運動を牽引したドイツ田園教育舎運動（*Deutsche Landerziehungsheim-Bewegung*）の主要な担い手を大いに魅了することになる。ドイツ田園教育舎運動に共鳴する教育者が設立した教育施設においては、いずれも作業場における活動が重視され、一部の教育施設ではこれに加えて作業場における活動を職業教育と結びつけるための模索も図られた¹⁵。

イギリス滞在中にレディ（Cecil Reddie, 1858-1932）のアボツホルム校（*Abbotsholme*）に強く感化されたリーツ（*Hermann Lietz*, 1868-1919）は、当時のドイツに支配的であった退廃的な都市文明に浸された教育環境のなかで知識の注入に腐心する教授型学校に対置される理想の学校の設立を目指し、ドイツ田園教育舎運動を興す。豊かな自然に抱かれた教育環境のなかで諸力の調和的発達を促す共同体型学校の原型として1898年に初等教育施設イルゼンブルク校（*Ilseburg*）を設立したリーツは、1901年にはその卒業生の受け皿として前期中等教育施設ハウビンダ校（*Haubinda*）を設立して移動し、1904年にはさらにその卒業生の受け皿として後期中等教育施設ビーバーシュタイン校（*Bieberstein*）を設立して移動する。リーツは新設校に移るに際して既設校についてはいずれもドイツ田園教育舎運動を支持する同僚教師にその運営を託していく。リーツが設立した教育施設の運営に携わった同僚教師はしかし、間もなくリーツと袂を分かちついで相次いで独立し、それぞれに独自色を発揮する新たな教育施設を設立することになる。

ドイツ田園教育舎の系譜に位置づけられる教育施設の設立者は1924年に一堂に会して「ドイツ田園教育舎および自由学校共同体連盟（*Vereinigung der deutschen Landerziehungsheime und freien Schulgemeinden*）」を立ち上げ、ドイツ田園教育舎の基本方針を確認する。連盟立ち上げ当初の加盟校は、リーツの教育舎（*Lietz-Heime*: 代表は *Alfred Andreesen*）・ヴィッカーズドルフ自由学校共同体（*Freie Schulgemeinde Wickersdorf*: 代表は校医 *Otto Garthe / Rudolf Aeschlimann*）・ショーンドルフ南ドイツ田園教育舎（*süddeutsches Landerziehungsheim Schondorf*: 代表は *Ernst Reisinger / Julie Reisinger*）・オーデンヴァルト学校（*Odenwaldschule*: 代表は *Paul Geheeb / Edith Geheeb*）・ゾリング田園学舎（*Landschulheim am Solling*: 代表は *Theophil Lehmann / Hans-Wildeckinde Jannasch*）・レッツリンゲン自由学校作業共同体（*Freie*

¹³ Greinert/Wolf 2013, S. 785. グライネルトとヴォルフによると、ヒベルニア学校の実践は職業教育の役割と機能において新教育の実践からは乖離する傾向がみられる（vgl. a.a.O., S. 786）。

¹⁴ Fintelman 1990, S. 13.

¹⁵ Vgl. Ito 2017, S. 47f. なお、学習と労働を結合するという教育構想に関しては、マルクス（*Karl Marx*, 1818-1883）に由来する社会主義的見地からは技術教育と生産労働という提案がなされている（vgl. Greinert/Wolf 2013, S. 780）。

Werk- und Schulgemeinde Letzlingen: 代表は Ludwig Rudolf Bernhard Uffrecht / Ini alias Hermine Uffrecht) ・
 ホーホヴァルトハウゼン山間学校 (Bergschule Hochwaldhausen: 代表は Otto Hermann Steche / Caroline
 Steche) という 7 校であり、加盟校の代表者はオーデンヴァルト学校で連盟の立ち上げの宣言に署名を
 行った¹⁶。諸力の調和的発達を促す共同体型学校というドイツ田園教育舎の基本方針に基づき、リーツ
 の教育施設の前教師が設立した教育施設にはいずれも作業場が併設されるが、やがてこの作業場におけ
 る活動を職業に関わる資格の取得へとつなぐ「社会への開かれ」志向の萌芽が生じることになる。作業
 場における活動をカリキュラムの基調とする教育実践を行った教育施設として注目されるのは、オーデ
 ンヴァルト学校とレッツリンゲン自由学校作業共同体である。

1902 年から 1906 年までハウビンダ校の運営に携わったゲヘーブ (Paul Geheeb, 1870-1961) は、1900
 年から 1903 年までイルゼンブルク校の運営に携わったヴィネケン (Gustav Wyneken, 1875-1964) ととも
 に、リーツと袂を分かちついで 1906 年に新たな教育施設となるヴィッカーズドルフ自由学校共同体を
 共同設立する。ゲヘーブはしかし、1910 年にはヴィネケンとも袂を分かち、妻エーディト (Edith Geheeb,
 1885-1982) とともにオーデンヴァルト学校を設立する。ケルシェンシュタイナーが提起する労作重視の
 教育に共鳴するゲヘーブは、労作学校の原理を導入したみずからの学校の教育実践を介して——具体的
 には、国語・英語・フランス語・ラテン語・数学・天体・生物・物理・化学・公民・歴史といった午前
 中の学課の後、午後には菜園作り・家具作り・本作りといった労作を日課とすることで——未来型ドイ
 ツ田園教育舎を軌道にのせようとする¹⁷。オーデンヴァルト学校において午後の労作に付された意義は、
 第一義的には生徒たちの諸力を全面的に発達させることにあった。主として経済的文化的に労働と疎遠
 な階層出身¹⁸の生徒たちを擁するオーデンヴァルト学校の共同体生活における労作の位置づけは、学校
 共同体の維持や生産活動の推進等とは無関係な活動とみなされる傾向が強かった。オーデンヴァルト学
 校では菜園や作業場における労作に多くの時間が割かれたものの、生徒たちに労作がもたらしたものは
 一時的な気晴らしないしは発表会における賞獲得という功名心に収斂されるものであった。オーデ
 ンヴァルト学校の生徒たちが労作の場で意識すべき相手として視野に入れていたのは発表会で打ち負かさ
 べき同じ共同体に所属する競争相手であり、その帰結としてオーデンヴァルト学校の生徒たちが労作の
 場で意識すべき相手が共同体の外にある「社会」にまで敷衍する契機はきわめて弱かったといえる。

存続期間が短いながらも労作重視の教育実践を真摯に追求した教育施設としては、ウフレヒト
 (Ludwig Rudolf Bernhard Uffrecht, 1885-1964) が妻イニ (Hermine Uffrecht, 1898-1961) と設立したレッ
 ツリンゲン自由学校作業共同体を挙げることができる。レッツリンゲン自由学校作業共同体はとりわけ
 作業場における活動と職業教育を徹底して融合させることを試みたという点で注視に値する。ゲッティ
 ンゲン大学で 1911 年に数学と物理の教員資格を取得したウフレヒトは、その翌年にヴィッカーズドルフ
 自由学校共同体に赴任し、1918 年までの在職中には 1916 年から 1917 年までは同教育施設の校長職も務
 める等、主動的な役割を演じている。しかし、1919 年に復職したヴィネケンと対立したことで同年のう
 ちにヴィッカーズドルフ自由学校共同体を辞し、ヴィッカーズドルフ自由学校共同体の生徒であった
 プッツ (Ernst Putz, 1896-1933) とともに新たに自由学校作業共同体 (Freie Schul- und Werkgemeinschaft;
 FSWG) を設立する。ウフレヒトの自由学校作業共同体はその拠点を何度か移すが、1922 年にはレッツ
 リンゲン狩猟用別邸 (Jagdschloss Letzlingen) を本拠地と定め、ここに学習と労働を一体化させた教育実

¹⁶ Vgl. Näf 2006, S. 290.

¹⁷ Vgl. Protokolle zu den 69. Schulgemeinden (1914); Protokolle zu den 72. Schulgemeinden (1914). オーデンヴァルト学
 校では、午後の労作に加えて、朝食後には「実質的な作業」として薪割り・ジャガイモの皮むき・家具作り・庭
 作りが実施されていた (vgl. Mann 1967, S. 178).

¹⁸ 生徒たちの主たる出身階層は商人・医師・大学教授・芸術家・法律家・技師・工場経営者・公務員・会社経営者・
 建築家・記者・牧師・教師に代表されるいわゆる新中間層であった (vgl. Näf 2006, S. 102).

践を展開していくことになる。教育実践の場となったレッツリングゲン狩猟用別邸が水道や電気や衛生設備といったインフラをまったく有していなかったことから、生徒たちはこれらを地元の職人の手ほどきを受けながら整備することから教育施設における生活を開始するが、この状況下にあつて設備管理、衛生管理（清掃）、さらには資金管理を包摂する共同体維持のため自治組織を立ち上げることになる。様々な出身階層から構成されたレッツリングゲン自由学校作業共同体の生徒たちのあいだでは家具職人・錠前職人等の資格取得のための職業教育、そして高校卒業（大学入学）資格取得のための一般教育の双方を修めることが標準型として定着していった。レッツリングゲン自由学校作業共同体における作業場の活動は、したがって、オーデンヴァルト学校における作業場の活動に比して「社会への開かれ」を意識した職業をより強く前景化することを特徴としていた。レッツリングゲン自由学校作業共同体における労作の位置づけは、学校共同体の維持に不可欠な日常生活における活動であり、その活動の場面には常に近隣の職人が指南役として寄り添っており、その帰結としてレッツリングゲン自由学校作業共同体における労作の場で意識する相手はきわめて自然なかたちでみずからの所属する共同体の外にある「社会」にまで敷衍する契機を内包していたといえる。

1924年の「ドイツ田園教育舎および自由学校共同体連盟」の創設後に新たに設立されたドイツ田園教育舎のなかで、職業教育に連なる作業場の活動を重視した教育施設として注目される教育施設としては、ウアシュプリング学校（*Ursprungschule*）が挙げられる。設立者となるベルンハルト・ヘル（*Bernhard Hell*, 1877-1955）は1901年にシュトゥットガルト工科大学で数学と化学を修め、さらにフライブルク大学で哲学と心理学を修めた後、ゲヘーブとヴィネケンが設立したヴィッカーズドルフ自由学校共同体に1907年に赴任する。しかし、1919年にヴィネケンがヴィッカーズドルフ自由学校共同体に復帰したことで——ウフレヒトと同様に——ヴィネケンとの不和を理由としてヴィッカーズドルフ自由学校共同体を辞する¹⁹。ヘルは1919年から1929年までゾリング田園学舎²⁰で教鞭をとるが、父の遺産を元手に1926年にはみずからの学校を設立する用地を探し始め、1929年にシェルクリンゲン（*Schelklingen*）に理想の地を見いだす。ヘルが新たな教育実践の地として選んだのは、12世紀にベネディクト派修道院として建設され、19世紀に修道院が転出した後には綿糸紡績工場・綿糸紡績工場として転用され、工場が転出した後には荒廃が進んでいた不動産である。1930年、52歳のヘルはこの地に妻エルゼ（*Else Hell*）²¹とともに福音学校共同体（*Evangelische Schulgemeinde*）ウアシュプリング学校を設立する²²。ウアシュプリング学校では、音楽・芸術・スポーツのための設備とならんで農場・作業場（錠前と建具）が整備され²³、作

¹⁹ ヘルは第一次世界大戦に参加したルゼルケ（*Martin Luserke*, 1880-1968）から校長職を引き継ぎ、1916年にはこれをウフレヒトに引き継いでいる（vgl. Günther 1980, S. 478）。1919年にヴィネケンが復帰した後、ヘルはウフレヒトとともにヴィッカーズドルフ自由学校共同体を辞する（vgl. a.a.O., S. 479）。

²⁰ ゾリング田園学舎はリーツのイルゼンブルク校に勤務していたヘルンフト派の5教師——クラマー（*Alfred Kramer*, 1868-1918）、レーマン（*Theophil Lehmann*, 1882-1943）、フィーブロック（*Gerhard Viebrock*, 1876-1961）、ツィンマーマン（*Gerhard Zimmermann*）、ヤナシュ（*Hans-Windekilde Jannasch*, 1883-1981）——によって1909年にホルツミンデン（*Holzminden*）に設立される。ゾリング田園学舎は農場と作業場を併設し、設立当初から労作を織り込んだカリキュラムの実施に力を注いでいる（vgl. Günther 1980, S. 480）。2013年には校名がゾリング寄宿舎（*Internat Solling*）と変更されたが、200名ほどの寄宿生と50名ほどの通学生を擁する現在も、職業教育を重視する学校として設立時の趣旨を継承している。この教育活動は公的機関からも評価され、2009年にはユネスコによってプロジェクト学校に指定されている。学習活動についてもその特徴ある実践を評価され、2015年には全国理数系優秀学校ネットワークの構成校となっている。

²¹ エルゼは第一次世界大戦で夫ベーム（*Wenzel Böhm*）を失っており、1923年のヘルとの結婚はベームとのあいだに1914年に生まれた息子ヘルムート（*Hellmut*）を連れての再婚となる。

²² 学校設立を目指すヘルには多くの大学関係者が支援者として名を連ねていた。代表的な人物としては、ノール（*Herman Nohl*, 1879-1960）やシュプランガー（*Eduard Spranger*, 1887-1963）やクロー（*Oswald Kroh*, 1887-1955）といった教育学者とシュテーリン（*Wilhelm Stählin*, 1883-1975）やケーバレ（*Adolf Köberle*, 1898-1990）といった神学者が挙げられる（vgl. Günther 1980, S. 489）。

²³ Vgl. Günther 1980, S. 495.

業場の活動においては学校近郊の住人との交流が目指された²⁴。1937年にはウアシュプリング学校の高
 校卒業（大学入学）資格取得するためのカリキュラムも認可され、ここに一般教育と職業教育を有機的
 に結合させたカリキュラムの土台が整うことになる。

4. 現代のドイツ田園教育舎系列校における作業場のレリヴァンス

ドイツにおいて新教育運動の担い手によって設立されたいわゆる「新教育学校」は1933年にナチス
 が政権を掌握して以降、さまざまな困難と向き合うことになる。ドイツ田園教育舎の系譜に位置づけら
 れる諸教育施設もまた例外ではない。設立当初の教育方針に変更を加えることで教育施設の存続を試み
 る事例もみられたが、多くの場合は設立者が教育施設の経営から退くことを余儀なくされる。ヴィッカー
 スドルフ自由共同体から離反するかたちで誕生したゲヘープのオーデンヴァルト学校とウフレヒトの
 レッツリング自由学校作業共同体は、1933年に政権を掌握した国家社会主義ドイツ労働者党の弾圧を
 受け、いずれもその設立当初の教育方針に沿った活動に終止符を打つことになる。しかし、第二次世界
 大戦後、ドイツ田園教育舎の系譜に位置づけられる教育施設のいくつかは設立当初の教育方針に立ち戻
 るかたちでの再建を果たしていく。それでは21世紀においてドイツ田園教育舎の系譜に位置づけられる
 諸教育施設において、「社会への開かれ」の一端をなす作業場における活動および職業教育はどのように
 継承されているのだろうか。

オーデンヴァルト学校ではナチスによる政権の掌握からほどない1934年に設立者であるゲヘープが
 妻とともにスイスに亡命し、1939年には学校そのものが国家勤労奉仕隊に接収されることになる。第二
 次世界大戦後、ゲヘープらの意向を受けて元ハウビンダ校教師シュペヒト（Minna Specht, 1879-1961）が
 1946年から1951年にかけて校長としてオーデンヴァルト学校の再生と改革に取り組み、新生オーデ
 ンヴァルト学校は1963年にはユネスコのモデル学校に指定される。オーデンヴァルト学校の設立時の教育
 構想・教育実践から継承された眼目のなかには、作業場における活動が含まれる。印刷・製陶・機械・
 建具という活動のそれぞれに作業場が設置され、生徒たちの活動の場として提供される。戦後は特に職
 業資格取得のカリキュラムの強化が進められる。生徒たちは高校卒業（大学入学）資格取得のためのカ
 リキュラムと並行して職業資格取得のためのカリキュラムを履修することで、「機械工」・「建具師」・「マ
 スメディア企画者」・「化学技術者補」という四職種については国家資格の取得への道が開かれること
 になる。ドイツ田園教育舎の旗手と目されてきたオーデンヴァルト学校は、1910年の創立から2015年の
 閉鎖にいたる105年の教育実践において、一貫して作業場における活動を重視し、戦後においては作業
 場における活動を職業資格取得に連結させる方向で変革を進めたと概括することができる。

国家社会主義ドイツ労働者党と敵対していたレッツリング自由学校作業共同体は、1933年に突撃隊の
 捜索を受けて11年間にわたる教育活動に終止符を打ち、ウフレヒトは教員資格を剥奪される。第二次世
 界大戦後、ウフレヒトはザクセン・アンハルト州の委託を受けて民主主義の原則に基づくモデル学校の
 構想の立案にたずさわるが、ソ連占領当局とのあいだに生じた軋轢によってモデル学校の構想は破綻し、
 ウフレヒトは解雇される²⁵。ウフレヒトは戦後の教育活動を軌道にのせる機会を逸し、レッツリング
 自由学校作業共同体の再生がかなうこともなかった。

ウアシュプリング学校は、1933年に政権を掌握した国家社会主義ドイツ労働者党の指示により、同年
 のうちに宗派教員を解雇することを余儀なくされる。ヘルは同僚教員とともに国家社会主義ドイツ労働
 者党に入党することで同党との妥結を試みるが、ヘルの年来のミカエル同胞団活動が同党によって問題

²⁴ Vgl. a.a.O., S. 486.

²⁵ Vgl. Näf 2006, S. 746f.

視されたことを受けてヘルは1938年にエーレッケ (Fritz Ehrecke, 1896-1946) へと校長職を引き継ぎ、1941年には学校の運営から完全に退く。ウアシュプリング学校は1944年には国有化されることになる²⁶。ウアシュプリング学校は第二次世界大戦後、ヘルの委託を受けた次世代の教員によってモンテッソーリ教育にもとづく小学校 (第3学年以降の初等教育機関)²⁷・自然科学を重視するギムナジウム (8年制中等教育機関)²⁸・実科学学校 (Realschule) ないし共同体学校 (Gemeinschaftsschule) の卒業生を対象とする3年制短期ギムナジウム (9年制中等教育機関相当) と段階的に整備・拡充される。ウアシュプリング学校は現在およそ200名の児童生徒を擁し、その半数以上は寮生であり、残りの児童生徒は隣接地域からの通学生である²⁹。

ウアシュプリング学校においては「生徒たちが作業場の手工業活動——仕立・建具・金属加工・製陶——を通じてこれらの経験を実地に積み重ね、生活と学習を総合的に結びつける緒を提供」³⁰することを謳っており、設立当初の教育方針が継承されていることが確認できる。ウアシュプリング学校が近年とりわけ力を注いでいるのは、学校での授業と並行して「建具師」・「仕立師」・「精密機械工」という3つの職種において資格取得へと連結する手工業実習を提供することである。

「高校卒業 (大学入学) 資格試験プラス職業教育 (Abitur plus Berufsausbildung)」というモットーをかかげたウアシュプリング学校では、高校卒業 (大学入学) 資格 (Abitur) と職人検定審査合格証 (Gesellenbrief) の同時取得を実現するカリキュラムが用意されており、仕立職と精密機械職という二つの職種のうちいずれかを選択した生徒たちについては、それぞれの職人検定審査に向けて体系的に組み立てられたカリキュラムを履修することにより、高校卒業 (大学入学) 資格取得のほぼ半年後には職人検定審査合格証を手にすることができるシステムとなっている。

仕立職を選択した生徒たちの場合、第8学年ないし第9学年から第12学年 (5年半ないし6年の期間) において追加で学内の作業場での準備を含む3840時間の授業と高校卒業 (大学入学) 資格試験後に数か月間の学外における実習後、ウルム手工業会議所およびウルム・ボーデンゼー・オーバーシュヴァーベン仕立職が主催する職人検定審査 (Gesellenprüfung) を受けることができる。毎年開催されるモードショーで披露される生徒たちの精魂傾けて制作した創造性に満ちた諸作品への評価にこの職業教育の優れた成果が表れているところであるが、ウアシュプリング学校ではこの職業教育によって生徒たちに資格取得への道を開くとともに、生徒たちが仕立業界の全体像を把握できるようなプログラムを構築することに心を砕いている³¹。

ウアシュプリング学校では15年程度前に新たな職業教育として精密機械職を導入した。ギムナジウムが手工業企業と連携して資格取得のための職業教育を実施することはきわめて稀なことであるが、ウアシュプリング学校は2014年に手工業企業リンデンマン (Lindenmann GmbH & Co. Präzisionsfertigung KG) と協定を結び、精密機械職の後進育成に力を注いでいる³²。精密機械職を選択した場合、生徒たちは、第8学年から第12学年 (5年半の期間) において4500時間の授業と240時間の企業実習、さらに高校卒業 (大学入学) 資格試験後に数か月間の学外における実習を経て職人検定審査を受けることができる。このカリキュラムを履修することで、生徒は自立した生活、さらには企業による資格認定を手

²⁶ ウアシュプリング学校の国有化は1945年をもって解消される (vgl. Günther 1980, S. 501)。

²⁷ 小学校では第3学年児童と第4学年児童という異年齢児童によって構成される学級であり、ここにはイエナプラン教育の影響がみられる。

²⁸ ギムナジウムでは実験と実践を軸とする合科的なカリキュラムが提供され、第8学年以降については「自然科学と技術」が必修科目として加わる (vgl. Ursprungsschule 2018c)。

²⁹ ウアシュプリング学校では、保護少年や発達障害をもつ児童生徒も受け入れ療育を提供している。

³⁰ Ursprungsschule 2018a。

³¹ Ebenda。

³² Ursprungsschule 2018b。

入れることが可能となる³³。

過去 30 年の実績としては、およそ 100 名の生徒が高校卒業（大学入学）資格試験と職人検定資格合格証を併せて取得してウアシュプリング学校を巣立っている。

5. 職業教育の視座からみた「社会への開かれ」志向の現状

新教育運動が全世界を風靡した時代から 100 余年の歳月を経た今日、「社会への開かれ」を支える跳躍板として機能した「学習と労働の結合」という新教育運動の教育方針に関わって何が継承され何が修正されているのか。労働市場の変化、経済構図の変化、社会における学習と労働の関係に対する認識の変化をその背景として、「学習と労働の結合」という教育方針を実践に移すに際しての具体的なプログラムの構築について大幅な修正が求められていることは言を俟たない。「学習と労働の結合」という教育方針を実践に移すプログラムの変容は、社会の要求に照らし合わせて教育施設がこれに合致する職業人を社会に送り出すという第二次世界大戦後における職業教育強化路線にとりわけ強く表れている。教育施設内の作業場における活動を職人検定審査につなぐカリキュラムの一環として位置づけて整備すること、教育施設外に職業実習の場を安定的に確保するために地方団体および地方企業と協定を締結することといった近年に顕著な動向はこの路線の追求を象徴しているといえる。

グライネルトとヴォルフが新教育運動の系譜に位置づけられるシュタイナー教育学を基礎とするヒベルニア学校における職業教育融合型カリキュラムに注視していたことはすでに言及したところである。本稿の検討対象であるドイツにおける新教育運動を牽引したドイツ田園教育舎の系譜に位置づけられる教育施設に関しては、「学習と労働の結合」という観点から 100 余年の教育実践において連続性と非連続性という二つの側面を確認することができた。すなわち、オーデンヴァルト学校が 2013 年に「未来の作業場」として認定され³⁴、ウアシュプリング学校が 2008 年に「職業準備優等賞」を授与されたことに象徴されるように³⁵、19 世紀末から 20 世紀初頭の世紀転換期に展開した新教育運動において「学習と労働の結合」を標語として作業場を設け「新しい」教育実践に着手した田園教育舎系の教育施設は、21 世紀の教育実践において「学習と労働の結合」を標語とする作業場の活動を継承しつつも、職業教育を足掛かりとするその「社会への開かれ」志向を前面に押し出すかたちで「新しい」教育実践の追求を現在進行形で重ねている。

参考文献

Fintelmann, Klaus J. (1990): Hibernia. Modell einer anderen Schule. Stuttgart: Klett-Cotta.

Greinert, Wolf-Dietrich / Wolf, Stefan (2013): Berufsbildung. In: Wolfgang Keim / Ulrich Schwerdt (Hrsg.): Handbuch der Reformpädagogik in Deutschland (1890-1933). Teil 1. Gesellschaftliche Kontexte, Leitideen und Diskurse. Frankfurt am Main: Peter Lang, 777-800.

Günther, Karl-Heinz (1980): Bernhard Hell. Gründer der Ursprungsschule. 1877-1955. In: Robert Uhland (Hrsg.): Lebensbilder

³³ Ebenda.

³⁴ 2013 年にオーデンヴァルト学校に授与された認定証には以下の記載がなされている。Odenwaldschule Heppenheim/ Die IHK Darmstadt Rhein Main Neckar verleiht diese Urkunde der Schule für ihre Teilnahme an dem Projekt ZUKUNFTSWERKSTATT/ Die Odenwaldschule hat das Ziel einer frühzeitigen Berufsorientierung ihrer Schülerinnen und Schuler durch das Konzept Zukunftswerkstatt in ihrem Schulcurriculum fest verankert. Darmstadt, 20. September 2013. IHK.

³⁵ 2008 年にウアシュプリング学校に授与された認定証には以下の記載がなされている。Fit For Job 2008/ Bundesschulpreis der Wirtschaftsjunioren Deutschland für herausragende Berufsvorbereitung/ Zertifikat/ Die Ursprungsschule aus Schelklingen hat als Finalist erfolgreich am Bundesschulpreis teilgenommen. Wirtschaftsjunioren Deutschland.

- aus Schwaben und Franken. 14.Band. Stuttgart: Kohlhammer, 467-502.
- Hell, Bernhard (2011): Die Evangelische Schulgemeinde. Versuch zur Gestaltung eines evangelischen Landerziehungsheims. Hrsg. von Ralf Koerrenz. Jena: Garamond.
- 本多由紀 (2005) : 『多元化する「能力」と日本社会 ——ハイパー・メリトクラシー化のなかで——』 東京 : NTT 出版.
- 本田由紀 (2018) : 「日本社会と教育のいま> ——ハイパー・メリトクラシーからハイパー教化へ——」 『近代教育フォーラム』 第27号、57-65.
- Ito, Toshiko (2017): Schulreform zur Erzeugung von Arbeitsfreude? Konzept und Realität der praktischen Betätigung in einem deutschen und einem japanischen Landerziehungsheim des frühen 20. Jahrhunderts. In: International Journal for the Historiography of Education 7 (1), 42-59.
- Koerrenz, Ralf / Toder, Dieter (Hrsg.) (2001): Schule als Gemeinde. Bernhard Hells schulpädagogische Schriften. Weinheim: Deutscher Studienverlag.
- Mann, Klaus (1967/2000): Kind dieser Zeit. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt.
- 文部科学省 (2017) : 『小学校学習指導要領』
- Näf, Martin (2006): Paul und Edith Geheeb-Cassirer. Gründer der Odenwaldschule und der Ecole d'Humanité. Deutsche, Schweizerische und Internationale Reformpädagogik 1910-1961. Weinheim/Basel: Beltz.
- Protokolle zu den Schulgemeinden (1914)
- Rist, Georg / Schneider, Peter (1977): Die Hiberniaschule. Von der Lehrwerkstatt zur Gesamtschule. Ein Waldorfschule integriert berufliches und allgemeines Lernen. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt.
- Rist, Georg / Schneider, Peter (1979): Integrating Vocational and General Education. A Rudolf Steiner School. Case Study of the Hibernia School, Herne, Federal Republic of Germany. Hamburg: UNESCO Institute for Education.
- Uhlig, Christa (2013): Arbeit. In: Wolfgang Keim / Ulrich Schwerdt (Hrsg.): Handbuch der Reformpädagogik in Deutschland (1890-1933). Teil 1. Gesellschaftliche Kontexte, Leitideen und Diskurse. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1011-1032.
- Ursprungschule (2018a): Abitur und Gesellenbrief (Maßschneider/in, Schwerpunkt Damen)
- Ursprungschule (2018b): Abitur und Gesellenbrief (Feinwerkmechaniker/in, Schwerpunkt Maschinenbaumechanik)
- Ursprungschule (2018c): Schule erleben. Zukunft bilden.

* 本稿は平成 30 年度科研基盤研究 (C) 課題番号 18K02277 の研究成果の一部である。